

TOKYO 人権



●インタビュー／生島 嗣

HIVを正しく理解し、
エイズについて自然に話せる
社会をつくりたい

●特集

イスラムは怖い？

となりに暮らすイスラムを正しく理解し、
共存するために

●寄付した本が寄付金に生まれ変わる
「チャリボン」

HIVを正しく理解し、 エイズについて自然に話せる 社会をつくりたい

いくしま ゆずる
生島 嗣さん
NPO法人ぶれいす東京 代表

かつて、HIV*1感染は死に直結すると恐れられていました。しかし、医療の進歩により、現在は早期に発見し適切な治療を受けることで、健康な人とほとんど変わらない生活を送ることができるようになってきました。それにもかかわらず、社会の理解が進んでいないために、HIV陽性者*2はいまでも差別を受けることが少なくありません。この課題にどう向き合うべきか、HIV陽性者とその周囲の人たちの支援を行う「NPO法人ぶれいす東京」代表の生島嗣さんにお話をうかがいました。

—HIV陽性者の支援に 関わるようになった経緯は。

初めてHIV陽性者の支援活動に関わったのは、30代前半のことでした。当時は薬局の営業の仕事をしていましたが、プライベートで雑誌制作に参加する機会があり、さまざまなボランティア団体取材することになったんです。その中の一つに、HIV陽性者の支援団体がありました。僕は中学生のころから自分がゲイ（男性同性愛者）であることを自覚していました。当時、「HIV感染はゲイの間に多い」といわれていたこともあり、この支援活動に強い興味を持ったのです。

しかしその時は、この活動に関わる理由を他人には話せずにいました。僕は、保守的なキリスト教の家庭で育ち、父が牧師をしていたからです。ゲイであることが教会に知れ渡れば、父に迷惑がかかると思いました。僕は自分のセクシュアリティを受け入れられず、「どうか僕を異性愛者に変えてください」と神に祈ったこともありました。

ちょうどその頃、生まれて初めてゲイの友達以外にカミングアウトをしたことが、大きな転機になりました。HIV陽性者の支援ボランティア仲間でもキリスト教徒の女性と友達になり、自分がゲイであることをおそるおそる伝えました。すると彼女は「あ、そうなの」と、そのまま受け止めてくれたのです。本当のことを伝えることができ、ありのままの自分を普通に受け入れてもらったことがとてもうれしかった。それだけのことが、こんなにも心の支えになると、初めて知りました。

平日はセクシュアリティを隠して仕事をし、週末だけはゲイの友達との関わりの中でだけ本当の自分に帰ることができる…そんな二重生活をだんだん息苦しく感じるようになっていました。HIV陽性者の支援活動に関わるうちに、医療の知識と、セクシュアリティの両方を生かせ、素のまま働けるこの場

*1 HIV ヒト免疫不全ウイルスの略称。このウイルスによって免疫細胞が破壊された結果、後天的に免疫が働かなくなり、別の病気にかかった状態をエイズ（AIDS 後天性免疫不全症候群）と呼ぶ。HIVは俗に「エイズウイルス」と呼ばれるが、病気の仕組みから考えるとこの俗称は誤りである。

*2 HIV陽性者 HIVに感染している人の総称。エイズを発症した人と、感染してはいても発症していない人の両方を含む。

こそ、自分にふさわしいのではないかと思うようになりました。これらの経験が原動力となり、HIV陽性者が自分らしく生きられる環境をつくるため、1994年に仲間とともに「ぶれいす東京」の立ち上げに参加し、翌年から職員として働きはじめました。

—HIVに関する医療の進歩で、何が変わりましたか。

1996年ごろにHIVの増殖を抑えるHAART（多剤併用療法）が導入され、これによって、完治はしませんがエイズの発症を防ぐことが出来るようになりました。今では、HIV感染は、かつての“死の病”ではない、感染したら一生付き合っていかなければならない“ただの病気”です。けれど今でも、社会の偏見・差別が、HIV感染をただの病気にさせてくれない、そんな状況が続いています。

医療の進歩で、現在ではHIV陽性者も定年まで働き、老後の人生を普通に考えることができる時代になりました。寿命は、健康な人と比べても数年しか差がなくなっています。適切な服薬治療を受ければ、検出できなくなるまでHIVを減らすことができ、他人へは感染しなくなります。子どもへの感染を防ぎながら、普通に妊娠・出産・育児することだってできるんですよ。

HAART導入以降、ぶれいす東京の支援活動も大きく変化しました。それまでは、余命が限られた人たちの通院などをサポートすることが活動の多くを占めていました。しかし、新しい治療法が広まってからは、長い人生を見据えた支援へと移行したのです。

とはいえ、私たちの活動が楽になったわけではありません。困難さの質が「短距離走」から「マラソン」に変わったようなものでしょうか。

どんな人にも、人生にはさまざまなライフイベントやアクシデントがあるものですが、同じ出来事でも、HIV陽性者は社会の無理解のせいで、理不尽な目に遭うことが多いのです。問題は本人だけでなく、周囲の人にも影響しますから、ぶれいす東京では、家族やパートナー、職場の人、本人が利用する社会サービスの職員など、本人に近い人たちからの相談も受け付けています。近年は、インターネットでさまざまな医



(株)電通がぶれいす東京に取材制作した「ソーシャル・ポスター展」の作品

療情報を調べられるようになりましたが、他の陽性者が普段どのように生活しているのかわかることはできません。だから、新たに感染がわかった人は、先行きが見通せず、不安になることがあります。そうした事情もあって、ぶれいす東京で受ける電話相談は1年間で約1,250件、対面相談は約700件と、かなりの数に上っています。

—どのような相談が多いですか。

HIVは依然、ゲイ男性に多い病気ですが、異性愛者（男女）で陽性の人もあります。だから、ぶれいす東京では性や年齢などに区別無く、どんな人のサポートもします。働く上での不安や将来設計、生活上の悩み、精神的な悩みなど、共通の相談が多いですね。

また、陽性であることのカミングアウトを巡る相談も数多く寄せられます。一人で秘密を抱えているのは本当につらいものです。家族やパートナー、これから恋人になるかもしれない相手など、大切な人にも知ってもらいたいと思うのは、誰にとっても自然な感情でしょう。私たちは、伝える相手がどのくらいの知識を持っているか、どうすればうまく受け止めてもらえるかを推し量りながら、相談者と一緒にカミングアウトの計画を立てます。中には、自分一人で伝えるのは難しいからと、ぶれいす東京に相手を連れてきて、私たちを交えて話をする方もいますよ。

HIV陽性であると知れたとたん、差別を受けることは少なくありません。正しい知識が広まっていないせいで、人権侵害が起こっているのです。一方で、医療の進歩で通院などが楽になり、職務上の配慮を求める必要性が低くなったこともあるのでしょう。近年は職場でカミングアウトする人の割合はやや減少しています。HIVに感染したからといって、そのことを話す義務はありませんから、どのような選択をするかは本人の自由です。しかし、社会の認識が追いついていないために、伝える必要があるときに伝えられないという、個人がストレスを抱え込みやすい状況は改善すべきだと思っています。

—HIV陽性者を、積極的に雇用する企業もあるそうですね。

1998年に、HIV陽性者は身体障害者認定を受けられるようになりました。こうした背景もあり、最近ではHIV陽性者を障害者枠で雇用する企業が増えてきました。私たちは、そうした企業の研修依頼も受けています。「HIV陽性の社員が大量出血したらどうすればいいんだ」といった、一般的な職場ではほとんどありえない場面や、「社員同士の恋愛で一方の社員が感染した場合、もう一方を陽性だと知って雇った会社は責任

を問われるのではないかと、おちついて常識的に考えればわかりそうな質問がよくあります。HIVと聞いたとたんに判断がおかしくなってしまうんですね。間違った認識がHIV陽性者への差別や、雇用の妨げにならないよう、丁寧に説明するようにしています。

印象的だったのは、あるアパレル企業での研修です。非常にオープンな雰囲気での研修でHIV陽性者の雇用に取り組んでいる職場でした。僕のレクチャーの後、人事担当者が社員に向けてこう言ったのです。「わが社はHIV陽性者を雇用する企業ですから、皆さんがHIV検査を受けた結果が陽性でも陰性でも、雇用関係は変わりませんよ」と。すると後日、実際に何人かが検査を受けたそうです。人事担当者からは「HIVへの人権的理解だけでなく、社員の健康づくりにも役立ちました」と喜ばれました。

HIV感染の判明は、保健所で自主的に検査を受けた場合が4割、それ以外は医療機関を別の理由で受診したときです。医療が進歩したとはいえ、感染に気づかずにいれば命に関わります。ところが1990年代に比べ、メディアがHIVを取り上げる機会は激減しました。このため、10～20代の人たちは「学校で少し習った」くらいの印象しか持っておらず、30代以上では、ネガティブで間違った情報が更新されずにいるか、もう終わった病気だと勘違いしていることが多いようです。行政には、正しい理解をもっと広め、早期のHIV検査の必要性を訴える責任があると思います。

—HIVへの理解を広めるために 考えていることは。

2017年11月に開催される「第31回 日本エイズ学会学術集会・総会」の会長を引き受けることになりました。無事に務まるか不安ですが、たくさんの方の後押しがあり、大役を引き受けることにしました。喫緊の課題は資金集めです。スポンサーになってくださる企業の方を募集しています。

学会のテーマは「未来へつなぐケアと予防」にしました。欧米で始まった新しい予防法や、啓発がうまく進まない近隣アジア諸国の現状など、海外には日本とは異なる状況があります。未来への展望と、諸外国との協力を見据えた内容にしたいと思っています。

一般への理解が広まるように、同時期に「TOKYO AIDS WEEKS」というイベントも開催します。この中で、以前も好評だった合唱ミニコンサート「Gay Men's Chorus」も行います。前回は新宿区にある国立国際医療研究センターで開催しました。コンサートを楽しんでいた他の病気の入院患者さんに何のイベントなのか聞かれ、HIVの啓発イベントであることや、合唱メンバーがセクシュアルマイノリティであること

などを説明したところ、「私は、いろんな人たちが世の中にいる方がいいと思う。そういう人たちがもっと表に出てこられる世の中だったらいいのに」と感想を話してくれたと、ボランティアさんがうれしそうに報告してくれました。HIV陽性者の人たちだけでなく、さまざまな人たちをエンパワメントすることができたことに、心が温まりましたね。

人は自尊心が低いと健康を保つための基本的な行動をとるのが困難になるということが多くの研究から明らかになっています。ですから、さまざまな生きづらさを抱える人たちの健康を保つためには医療だけでなく、地域福祉や人とのつながりの構築など広範囲の支援が必要です。ぶれいす東京には、HIV陽性者から生きづらさについての相談も多く寄せられます。HIVの問題もまた、隣接するさまざまな社会課題と無縁ではありません。みんなが健康で幸せに暮らせる、よりよい社会にしたい。その実現の一端を担えるよう、これからも活動を続けていこうと思っています。

インタビュー／鎌田 晋明(東京都人権啓発センター 専門員) 編集／小松 亜子
撮影(表紙・2～4ページ)／細谷 聡 取材会場／ぶれいす東京

●生島嗣(いくしま・ゆずる)



1958年、神奈川県生まれ。NPO法人ぶれいす東京 代表。社会福祉士。1994年にぶれいす東京の立ち上げに参加し、翌年、脱サラして職員に。2012年、前代表の池上千寿子氏の後を継ぎ、新代表に就任。保守的なキリスト教の家庭に育ちながら、中学時代に自らが同性愛者であることを自覚。30代前半、『別冊宝島EX ゲイのおもちゃ箱』(JICC出版局)の制作に携わったことをきっかけに、HIV陽性者の支援に取り組む。やがて牧師である父親にカミングアウトするものの、受け入れられず、一時関係を断絶。しかし数年後、父親がHIV陽性者の支援活動に理解を示すようになり、現在は良好な関係に。自身のセクシュアリティをオープンにしてからは、HIV陽性者に限らず、行政機関や医療機関から相談を受けることも多い。HIVについての人権研修講師のほかシンポジウム等での登壇も多数。2017年11月の第31回 日本エイズ学会学術集会・総会では会長を務める。



特定非営利活動法人
ぶれいす東京
Tokyo

<http://ptokyo.org/>

ポジティブライン(厚生労働省委託事業) ☎0120-02-8341
HIV陽性者と周囲の人、確認検査待ちの人の電話相談です。

冊子『Living with HIV 身近な人から
HIV陽性と伝えられたあなたへ』
発行 NPO法人ぶれいす東京
HIV陽性者と身近な人たちの手記集を
無料で配布しています。HIV/エイズ
を理解するために役立ててください。



Living with HIV <http://lwh.ptokyo.org/>

TOKYO AIDS WEEKS 2017

<http://aidsweeks.tokyo>

第31回 日本エイズ学会学術集会・総会

「未来へつなぐケアと予防」<http://aids31.ptokyo.org/>

いずれも2017年11月24日(金)～26日(日)

読み終えた本が世のため人のために

寄付した本が寄付金に生まれ変わる「チャリボン」

いつの間にか部屋が本でいっぱいになって困る。でも、思い入れがあるから捨てるのは気が進まない…。それならば、「寄付」してみてもはどうでしょう？ 古本の買取代金が、自分の選んだNGO/NPOに寄付されるという、部屋も片付いて社会貢献もできる魔法のような取り組みについて取材しました。

「チャリボン」は、インターネット古書店を営む(株)バリューブックスが、行っているファンドレイジング(寄付金集め)を支援する仕組みです。名前は“チャリティー”と“本”に由来します。通常の本の買取では、本の買取代金はバリューブックスから売主に支払われます。しかし、チャリボンでは、代金が本の寄付者が指定した団体に支払われます。そうして同社に集まった本は、古書としてネットで販売されます。チャリボンを活用し寄付金を募るのは、子どもや若者の支援、障害者支援、難民支援など、人権に深く関わる社会課題の解決に取り組むNPOや大学など160以上の団体です。2010年にこの取り組みが始まった当初、寄付された本は年7万3,000冊、約200万円でした。それが2016年には、年300万冊、約6,800万円にもなりました。

チャリボンでの寄付が増えていく背景には2つの理由があります。1つは、お金よりもモノでの寄付の方が、寄付をする人にとっても、寄付を呼びかける団体にとっても



鳥居 希さん

気負わずにできるということ。もう1つの大きな理由は、バリューブックスが持続可能な寄付の仕組みを追求したことです。同社の取締役でチャリボンの運営に携わる鳥居 希さんは、次のように話します。

「チャリボンはCSR(企業の社会的責任)としての活動ではないんです。そもそもの事業主旨が『本を通して社会を良くしていきたい』ということにあります。本業の業績が思わしくなかったら止めてしまう活動ではなく、本業と同じ仕組みを使って寄付を集め、本業の中に寄付金集めのプロセスを組み入れています。買取代金の支払先が売主なのか寄付先なのかは異なりますが、本を買い取るのも寄付として受けるのも、古書を仕入れる方法としては区別していません。そのような方法で、本業を生かした価値を社会に還元しています」(鳥居さん)。

2011年の東日本大震災では、チャリボンの仕組

みが大いに生かされることになりました。陸前高田市の図書館が津波で壊滅的な被害を受けたことが報道されると、日本中から同市に書籍の寄付が殺到したのです。しかし、その時点で必要だったのは書籍そのものではなく、図書館再建に必要な資金でした。そこで、バリューブックスは2012年に「陸前高田市ゆめプロジェクト」を開始しました。これは、同プロジェクト宛に寄付された本の買取代金を陸前高田市に寄付するというもので、2017年3月末までに約200万冊の本が寄付され、それが3,700万円超もの寄付金になりました。現在、同市では新図書館の開館に向け、着々と準備が進められています。



長野県上田市にある(株)バリューブックスの倉庫。在庫は183万冊！

本を寄付してくれる大勢の人たちの気持ちを推し量り、同社の廣瀬 聡さんはこう言います。

「本好きの人たちにとって、大切な本を手放すのはとても心が痛むことです。でも、本の寄付が社会の役に立つなら、さわやかでポジティブな気持ちになれると思うんです。チャリボンをそういうふうに活用してもらえればと思います」(廣瀬さん)。

大切な本を捨てずに部屋を片付けることができ、さらに人を喜ばせることもできることから、学校や企業など、グループ単位で古本を集めてチャリボンで寄付する人たちも増えているようです。皆さんも、読み終えた本で、少しでも社会課題の解決に参加してみませんか？

インタビュー／鎌田 晋明(東京都人権啓発センター 専門員) 編集／那須 桂

もっと知りたい!

- チャリボン
<http://www.charibon.jp/>

charibon

本を送るだけで、社会のために活動を行っている様々な団体に寄付することができます。支援先や寄付の方法はホームページをご覧ください。

<取材先情報>

- ・株式会社バリューブックス
<http://www.valuebooks.jp/>

VALUE BOOKS
whole sale books and recycle books company.

イスラムは怖い？

となりに暮らすイスラムを正しく理解し、共存するために

「イスラム国」によるテロに見舞われているヨーロッパ各国では、イスラム教徒を排斥、排除する声が高まっています。しかし日本に暮らす私たちは、イスラム教やその社会について断片的な知識しかないまま、イスラム教は怖いという思い込みにとらわれてはいないでしょうか。なぜこのような事態になっているのかを知ること、共生に向けた理解を深めることが必要です。

イスラム教とは

いまや世界人口の4分の1にあたる15～16億人がイスラム教徒（ムスリム）^{*1}で、近い将来、3分の1に達すると予想されています。日本を含めて、今後、イスラム教徒とかかわることなく暮らすことはできません。しかし“イスラムは怖い”というイメージが流布しています。はたして本当に“怖い”のでしょうか。

「もしイスラム教が人を不幸にする宗教だったら、これほど広がることはないはずです。テロ事件が多発している現状だけでイスラム教を議論するのは間違っています。そこに至る歴史や、彼らの考え方を学ぶことが必要です」。そう話すのは、30年以上、西欧社会のイスラム教徒であるトルコ移民に向き合ってきた同志社大学大学院教授の内藤正典^{なとうまさのり}さんです。

そもそもイスラムとはどのような意味なのでしょう。か。「イスラムとは『唯一絶対の神であるアッラーに従うこと』を意味します。つまりイスラム教とは、イスラムを『する』宗教なのです。この『神に従う』というところを『神への絶対服従』と捉えられることが多いのですが、それは誤解です。イスラムにおいて神

の下にある人間は平等です。そして神に従うということは、すべてを神に委ねることになります。物事の結果は神の意思としてすべて受け入れる。あれこれ言っても仕方ないし、それは神の領分なのだから触れないでおこうという感覚なのです」（内藤さん）。

イスラムの知恵と価値観

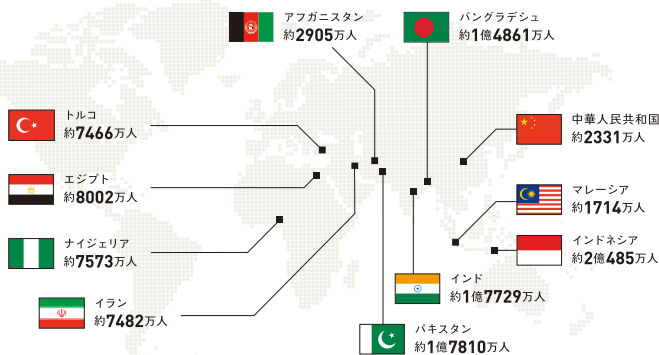
イスラム教は砂漠の民の宗教ではなく、都市の商人の宗教として生まれたものです。そのため、教えの中には商売に関するものもあります。例えば「儲かたときには自分の才能で儲けたと思わず、神に対する貸付^{もよう}というかたちで貧しい人に分け与えなさいというものです」（内藤さん）。これは、事業に失敗してしまった人への救済の意味もあり、格差拡大を防ぐ公正なルールとして、非イスラムの社会でも参考になります。

また、イスラム教徒の女性が身につけるスカーフやヴェールをめぐる、フランスでは公共の場所での着用の是非が議論されていることについて、内藤さんは次のように言います。「スカーフやヴェールでなぜ隠すのか」というと、夫や家族以外の異性の視線をさえぎるためであり、髪の毛やうなじが性的な羞恥心の対象だからです。たしかにその羞恥心はイスラムの規範からきているのですが、本人が『恥ずかしい』と思っているのに、西欧的な感覚で『外せ』というのはおかしいことではないでしょうか。

そのほかにも、子供や高齢者を大切に、困っている人がいれば必ず何かしようとするなど、イスラム教の信仰に基づく行動は、「社会を不幸にするとは考えられないものばかりです。だからこそ、イスラム教は膨大な数の信者を集めているのでしょう」（内藤さん）。

西欧社会に翻弄される移民たち

それでは、なぜそんなイスラム教徒と、凄惨なテロ



主要国のイスラム教徒（ムスリム）人口

2010年の推計人口。2010年には16億人を占め、世界人口の4分の1に達した。
 出典：「ムスリム旅行者おもてなしハンドブック」（東京都産業労働局観光部振興課／平成26年10月）を元に一部改変

が結びつくのでしょうか。それには、西欧社会におけるイスラム圏からの移民問題があります。まずはその歴史を振り返りましょう。

西欧諸国がイスラム圏から移民を受け入れ始めたのは半世紀以上前のことです。第2次大戦による労働力不足を安価に埋めることが目的でした。冷戦中は東欧圏からの受け入れができなかったため、各国は欧州に隣接するトルコのほか、旧植民地の国々から労働者を受け入れたのです。

しかし、第一次石油危機が起こった1973年ごろ、景気が後退した西欧諸国は、一斉に外国人労働者の受け入れを止めます。ところがそれで移民がいなくなったかという、逆に大幅に増えました。イスラム教徒は家族の絆を大事にしますから、単身で出稼ぎにきていた労働者の多くが「今後、会えなくなるかもしれない」と、母国から家族を呼び寄せたためです。こうして、西欧諸国にイスラム圏出身の移民によるコミュニティが出来上がっていきました。

「80年代後半、冷戦が終結に向かうと、欧米では、『文明の衝突』^{*2}という書物を代表とする、共産主義の次の“敵”としてイスラムに目を向ける主張があらわれ始めます」。しかし、この段階ではまだ、市民の多くは「隣人」として働いていたイスラム教徒に敵意を向けてはいなかったと言います。

しかし、2001年9月11日にアメリカで発生した同時多発テロの後、状況が一変します。欧米ではイスラム教徒を「暴力的で危険」「個人の自由も人間の主体性も認めない」として差別、排斥する動きが急激に強まりました。西欧諸国でテロが相次ぐ現在、ますますその流れが加速しています。

このようにイスラム圏から西欧諸国に移民した人たちは、何世代にもわたり住み続けていても、「景気が悪くなると仕事を奪っていると言われ、彼らが暇そうに車で集まっていれば、社会保障の恩恵に預かっていると批判を浴びるなど、受け入れた国側の都合で歓迎されたり、排除されたりする不安定な存在であり続けています。さらに『危険』だと敵意を向けられ、虐げられる日常が続くなかで、自分たちの居場所や頼りにするものを見出すことも難しい彼らは、受け入れ国の社会に同化せず、イスラム教徒として再覚醒していったのです」(内藤さん)。

「イスラム」と共存するために

「イスラム国」はこのような背景を突いてきました。インターネットを駆使して差別的に扱われているイス

*1 イスラム教徒はアラビア語で「ムスリム」(女性はムスリマ)と呼ばれる。
*2 著者はアメリカ合衆国の政治学者S・ハンチントン。文明が異なれば互いに衝突する。東西冷戦後、西欧、イスラム、儒教など文明の対立が紛争の要因となると主張。1996年刊行。

ラム教徒を扇動し、テロリストにリクルートするのです。実際に扇動に乗る人は少数ですが、イスラム教徒が世界に15億人いると考えれば、計算上10万人に1人でも1万5千人がテロリストになってしまいます。

イスラム教は約1400年前に誕生して以来、ずっとキリスト教やユダヤ教といった異教徒と隣り合わせでした。そのため、共存のための伝統や知恵を積み重ねてきました。しかし『『コーラン』と預言者の言ったことや行い(スンナ)のみに依拠する『イスラム国』は寛容さや共生の知恵に学ぶ気がありません。それが大きな問題なのです。さらに、軍事的に『イスラム国』を掃討しても、欧米諸国がイスラム教徒への敵視をなくし、差別や排除をやめないことには、また同様の集団が表れるでしょう。また一方で、イスラム教徒の母国が、彼らが西欧へ移民しなければならないような、イスラムの公正と正義にもとづく安心した国でないことにも責任があるのです」と内藤さんは話します。

イスラムの規範と近代西欧に生まれた思想との間には、どうしても交わらない部分があります。「ですから、お互いに自分たちの価値観を一方的に押し付けているようでは、共存の道は開けないのです。西欧社会にとって重要なのは、イスラムの価値体系が、自分たちの価値体系と根底から異なっていることを理解することです」(内藤さん)。

今後、東京でも私たちは観光客をはじめとして、イスラム教徒と接する機会がますます増えることが予想されます。そのとき、偏見に基づく差別を行わないためにも、イスラム教徒たちがどのような価値観に基づき、どのような行動をしているのかを正しく理解することが、不可欠なのです。

インタビュー/林 勝一(東京都人権啓発センター 専門員) 編集/脇田 真也



同志社大学大学院
グローバル・スタディーズ研究科
教授 内藤正典さん

“イスラムは怖い”
という思い込みを
解くために



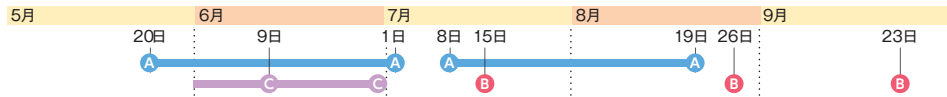
となりのイスラム
世界の3人に1人がイスラム教徒になる時代

内藤正典(著) ミシマ社/2016年7月
イスラム世界と西欧世界がこれ以上、対立し、暴力の応酬に陥ることを避けるためには、どんな知恵が必要なのかを考えてみませんか。



ムスリム旅行者
日本とイスラムをつなぐための3つのこと

東京都産業労働局観光部振興課 / 平成26年10月
<http://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.jp/tourism/kakusyuu/handbook/pdf/msrim.pdf>



A 写真展 無料

「人権という希望 11人の写真家がいま、伝えたいこと」

展示 写真を通じて、人権について考える展示です。

- 会期 2017年3月15日(水)から8月19日(土)まで
祝日でも開室します。日曜と各期間の展示入替時は閉室します。
- 時間 9:30 ~ 17:30

第1期 3月15日(水)から5月13日(土)まで 終了

「すべての人は、この世に一人しかいない。」

落合由利子、大西暢夫、太田順一、
宇井眞紀子(監修)

第2期 5月20日(土)から7月1日(土)まで

「生きる。」

松澤コウノスケ、橋本弘道、亀山亮、
高松英昭(監修)

第3期 7月8日(土)から8月19日(土)まで

「かき消される小さき声。」

趙根在、石川武志、
片野田育(監修)

- 会場 東京都人権プラザ 企画展示室
(港区芝2-5-6 芝256スクエアビル1階)
- お問い合わせ 東京都人権プラザ
TEL 03-6722-0123 <http://www.tokyo-hrp.jp/>

B 人権問題都民講座 参加無料

「音楽から人権を考える」

講演 人権と音楽の関わりを様々な角度から考える連続講座です。

第1回 2017年7月15日(土)

「誓女唄(ごぜうた)とは何か
~時代と民衆の声を聴く~」

ジェラルド・グローマー(山梨大学教授)

第2回 2017年8月26日(土)

「歌謡曲から見える私たちの社会
~叙情と流行とジェンダー~」

舌津智之(立教大学教授)

第3回 2017年9月23日(土・祝)

「音楽における黒人文化
~アメリカ奴隷制の時代から
キング・オブ・ポップまで~」

ウエルズ恵子(立命館大学教授)

- 時間 14:00 ~ 16:00(全日程とも)
- 会場 東京都人権プラザ セミナールーム
(港区芝2-5-6 芝256スクエアビル1階)
- 定員 各回80名
- お問い合わせ (公財) 東京都人権啓発センター
TEL 03-6722-0085 FAX 03-6722-0084
メール ※ホームページをご覧ください。 <http://www.tokyo-hrp.jp/>

C 6月は東京都HIV検査・相談月間です!

昨年、都内でHIV感染が分かった人(HIV感染者・AIDS患者)は464人でした。HIVは感染しても症状がほとんどなく、感染を知るには、検査を受けないとわかりません。そのため**早めの検査がとても大切です**。この機会にHIV検査を受けてみませんか。

- お問い合わせ 東京都福祉保健局 健康安全部 感染症対策課 エイズ対策担当 TEL 03-5320-4487

エイズはあなたから変えられる。

- 市内保健所等での検査相談** 無料・匿名
- 東京都HIV検査情報Web <http://tokyo-kensa.jp/>
- 東京都HIV/エイズ電話相談**
- TEL 03-3292-9090 匿名



Words of Love
~ Let's talk about HIV/AIDS ~

- 第1回 2017年6月9日(金) 19:00 ~ (YouTube)
- テーマ 「正しく知ろうHIV/エイズ」
- MC ライセンス
- ゲスト LOW IQ 01
- 番組HP <http://wordsoflove.jp/>



(公財)東京都人権啓発センター賛助会員募集のご案内

皆様とパートナーシップを築き、人権意識の高揚、人権問題の解決に向けて、ともに手を携えてまいりたいとの趣旨から賛助会員制度を設けております。趣旨にご賛同いただき、ご加入下さるようご案内申し上げます。

- 個人賛助会員 一口 2,000円
- 団体賛助会員 一口 30,000円
- お問い合わせ (公財) 東京都人権啓発センター 総務課 TEL 03-6722-0082

(公財)東京都中小企業振興公社 (株)首都圏環境美化センター (公財)東京都歴史文化財団 (株)ミライト・テクノロジーズ 東京都中小企業団体中央会 東京都下水道サービス(株)	(一財)東京都営交通協会の (一社)東京都信用組合協会 東京都人権啓発企業連絡会 (公財)東京都学校給食会 (一社)東京環境保全協会 (株)東京国際フォーラム	東京臨海高速鉄道(株) (公財)東京都環境公社 (株)東京エイドセンター (公財)東京しごと財団 東京水道サービス(株) 東京交通サービス(株)	東京都住宅供給公社 東京都職員信用組合 東京都商工会連合会 東京臨海熱供給(株) (株)東京ビッグサイト (公財)東京観光財団	(公財)東京税務協会 (公大)首都大学東京 (一財)東京都済済会 自治労東京都本部 (株)東京交通会館 東京食肉市場(株)	NPO 法人 TEOS (株)日本アクセス 東京港埠頭(株) (株)ゆりかもめ (有)関東紙業 (順不同)
--	--	---	--	--	--

● 編集後記

差別語かどうかは文脈の中でのみ判断しうが、その不確かさを嫌う人はいる。この世の全てが他との関係性無しに成立しえないという、万物照応の宇宙の神秘を見るようで、私はそれを面白いと思う(餃)

写真展第2期が始まった。ある日のこと丁寧に写真を見る一人の若者がいた。ソファに座り考え込み、また立ち上がり一枚一枚に近づく。"写真と向き合い、自分とも向き合う。"写真展の醍醐味だ。(林)

TOKYO人権 Vol.74 2017年夏号
2017年5月31日発行(年4回発行)

- 制作・印刷 / 株式会社トライ
- 発行 / 公益財団法人 東京都人権啓発センター
〒105-0014 港区芝2-5-6 芝256スクエアビル 2階
TEL 03-6722-0086 FAX 03-6722-0084
<http://www.tokyo-jinken.or.jp/>

